



統計から社会の実情を読み取る

第101回 県民意識の列島分布（県民性のデータ分析）

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団法人国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか:統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年)等。PRESIDENT Onlineにて連載を執筆中。



ムラ意識の県民比較

1変数の分析としてランキングを示す棒グラフなどが使われるが、2変数の分析としては散布図が使われることが多い。散布図は2変数の関係を調べる場合は相関図と呼ばれるが、相関図としてだけではなく、2変数によってデータの分布状態そのものを調べるグラフとしても使用される。今回は県民性を題材に、散布図を使った分布分析の実例を取り上げることにする。

県民性の分析資料としては、NHK放送文化研究所が1978年と1996年に個人面接法で行った全国県民意識調査が使われることが多い。この調査では1県900人規模の調査対象から各県平均7割(1996年)の回答を確保している。最近は、多数の登録会員を対象にしたインターネット調査で県別の意識調査が手軽に行われるようになっているが、対象がネットに習熟し、会員登録して小金を得る人だというバイアスの存在から、事実の有無を調べる調査ならともかく、県民意識というような題材の場合、やはり、結果の信ぴょう性に疑いが残る。そこで、今回は、

少し古いが1996年のNHK調査の結果を使うことにする。

散布図のX軸、Y軸を構成する2変数としては、第1に、類似性の高い2変数を取り上げて、県民性の共通傾向とそれからの逸脱の把握を試み、第2に、関連性の薄い2変数によるバラツキの大きな分布から県民性のグルーピングを試みた。

最初に取り上げたのは、ムラ意識である。NHKの県民意識調査の設問の中でムラ意識に関わるデータには以下の二つがある。

- ①「公共の利益のために個人の権利が多少制限されてもやむをえない」という意見に「そう思う」とする割合
- ②「本来自分が主張すべきことがあっても、自分の立場が不利になる時はだまっていることが多いですか」に対して「はい」と答えた割合

①は「公共精神の高さ」を示す「積極的ムラ意識」と捉えられるし、②は「自己抑制主義」

を示す「消極的ムラ意識」と考えられよう。①、②をそれぞれY軸、X軸にあらわした散布図を図1に掲げた。

積極的ムラ意識と消極的ムラ意識とは、ゆるやかな右上がりの分布が認められ、予想されたことであるが、共通する側面があるといえよう。両方ともに高い地域としては福島、島根が目立っており、両方ともに低い地域としては鹿児島が目立っている。

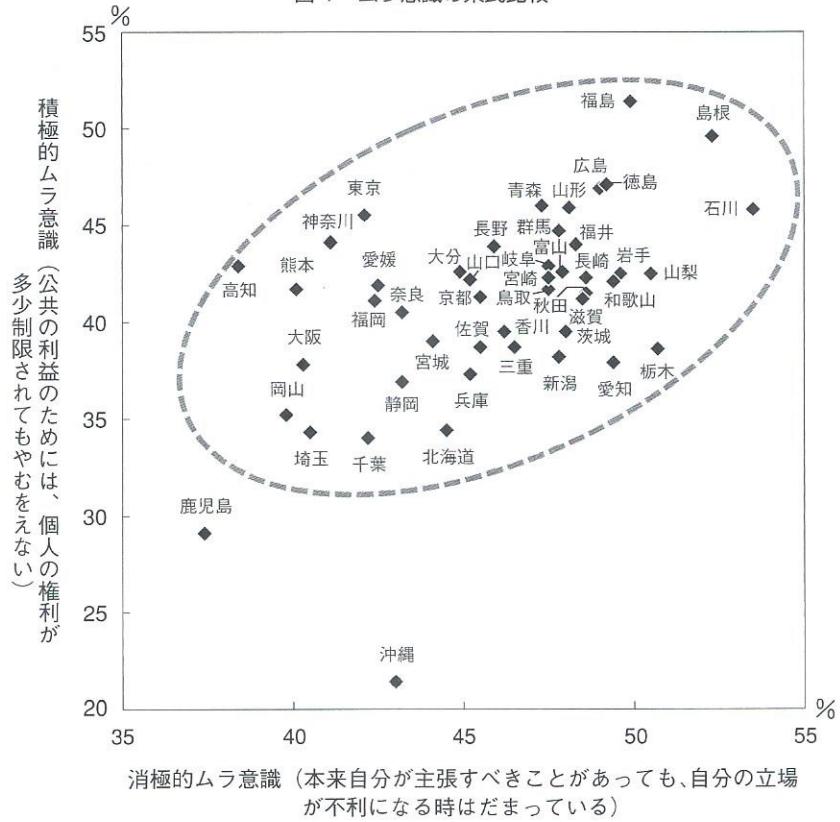
この共通傾向から大きく外れているのは、沖縄であり、消極的なムラ意識は平均的である

一方で、積極的なムラ意識は、他県とは比べものにならない位、弱いのである。沖縄県民は、公共の利益をあまり重視していないのか、それとも個人の権利を極めて重視しているのか、そのどちらか（あるいは両方）なので、こうした特異な位置を占めるに至っているのであろう。沖縄の文化的な特異性がうかがわれる調査結果のひとつであろう。

消極的なムラ意識では高知も鹿児島に次いで意識が薄いのが目立っている。

普通考えると、ムラ意識の強弱は、地方圏で強く、大都市圏で弱いはずであるが、必ずしもそうでない点が興味深い。同じ大都市圏に属する地域でも、埼玉、千葉、大阪などは積極的ムラ意識と消極的ムラ意識の両方で低い意識と

図1 ムラ意識の県民比較



資料) NHK放送文化研究所「現代の県民気質—全国県民意識調査—」

なっているが、東京、神奈川は、消極的なムラ意識は弱いが、積極的なムラ意識はむしろ強い方であるし、愛知は、積極的なムラ意識は弱いが、消極的なムラ意識はむしろ強くなっているのである。

日本のムラ制度はイエ制度とともに中世後半に成立したといわれる。イエの継承の安定性がムラ秩序の確立につながったとされるのである。こうした社会制度が成立する以前の日本社会は東南アジア社会などと類似性があり、イエ・ムラ制度の成立が未発達だった鹿児島ではその名残りが強く残っているとされる。そこでは分割相続にもとづく流動性が集落生活の特徴となっている。また、永続性をもった地域と家族のヒエラルキーは存在せず、その都度の自己中

心的な社会関係が中心となっているという（坂根嘉弘『日本伝統社会と経済発展』農文協、2011年）。

鹿児島では、個人の権利の制限を受けつけず、自分の主張を抑制することも少ないと、このデータは、こうした見方とは整合的である。歴史的な経緯から沖縄が特異であるばかりでなく、鹿児島（あるいは高知）でも、ムラ意識が特異な状況を示しているのである。

ムラ意識の地域分布を確かめるため、地方ブロックごとに各県の位置を確認すると、東北6県や北陸4県は構成する県の位置が近く、しかも全体にムラ意識が強い傾向が認められる。一方、九州7県も鹿児島を除いて各県の位置は近

いが、全体としてムラ意識は、東北、北陸より弱い。これらの諸県の分布を見る限りは、ムラ意識は東高西低の傾向をもっているとも見える。

ところが、中国、四国の各県の位置を見ると、それぞれ、全国の分布範囲と重なるぐらいばらけており、相互に近似性が乏しい。とくに、中国地方の島根と鳥取、あるいは岡山と広島という隣接県どうしでは、真反対ともいえる位置にあり、どうも理解しにくいところが残るのである。

「よそ者意識」と「無常観」の県民意識

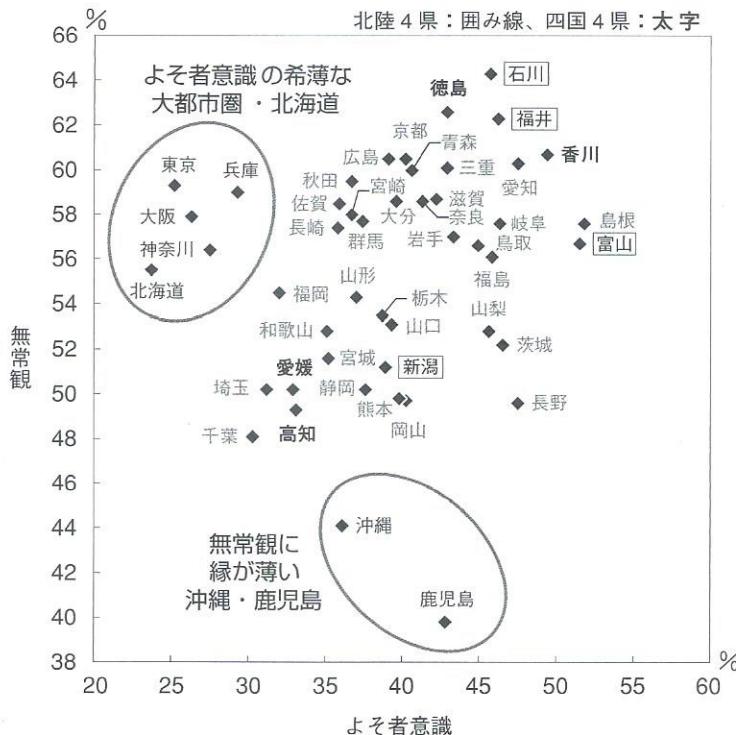
次に、都道府県ごとの県民気質の違いがよくあらわれている設問であるが、相互の関連性は

薄い二つの特性、すなわち、「よそ者意識」と「無常観」を取り上げ、両者をX軸、Y軸とする散布図を描いて、県民性の分布を探ってみた（図2参照）。

「よそ者意識」が希薄な地域としては、東京、神奈川、大阪、兵庫といった大都市圏と北海道が目立っている。埼玉、千葉、福岡などもこれに準じている。流入者を「よそ者」扱いしないのが大都市圏や明治になってから開拓が進んだ北海道の特徴であることはいうまでもない。なお、やはり大都市圏に属する福岡、埼玉、千葉などもこれらに次いで「よそ者意識」は低くなっている。

これらの都道府県とは対照的に、大都市圏に属するにもかかわらず「よそ者意識」が

図2 よそ者意識・無常観の県民意識



注) 各県 16 歳以上 900 人を対象とした 1996 年の個人面接調査による（回答率全国平均 70%）。「よそ者意識」は「この土地の人でない、いわゆる『よそ者』」というようなことばが、この地域ではまだ生きていると思いますか」に「はい」と回答した割合。「無常観」は、「この世の中のどんなものも、人の心も、すべて滅びやすく変わりやすいものだ」に対して「そう思う」と回答した割合。

資料) NHK 放送文化研究所「現代の県民気質—全国県民意識調査一」

強いのは愛知、京都、奈良である。

特に愛知県民は我が国第3の経済中枢都市である名古屋圏を抱えている割に「よそ者意識」が強いと多くの県民自体が自覚している点が目立っている。かつて名古屋人のパターンとして「新聞は中日、車はトヨタ、野球はドラゴンズ、銀行は東海銀行でお歳暮はかならず松坂屋で」といわれたが、域外の資本にソッポを向き、地元のものに絶対の声援を送る特色は変わっておらず、一言で評すると「偉大なる田舎」の特性があらわれているとされる（祖父江孝男『県民性』中公新書）。

愛知を上回って「よそ者意識」が全国で最も強い県は、島根、富山、香川である。

一方、「無常観」は災害の多い日本列島の生活の上に仏教や方丈記などの歴史的な思想・宗教が積み重なって日本人に根づくようになった考え方だと思われるが、「無常観」が強い県としては石川、徳島、福井などがあげられる。

蓮如の御文（おふみ）「白骨」には次のようなくだりがあり、浄土真宗の葬儀で拝読されるのを聞く機会が多い。「されば、朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、即ち二つの眼たちまちに閉じ、一つの息ながく絶えぬれば、紅顔むなしく変じて、桃李の装いを失いぬるときは、六親眷属あつまりて嘆き悲しめども、さらにその甲斐あるべからず」。浄土真宗が普及している地域ではこうした御文の影響もあるう。

逆に「無常観」とは縁の薄い県としては、沖縄と鹿児島が目立っている。沖縄と鹿児島は他の県とは無常観では距離が大きく、日本の中でも文化的な差異が大きい地域であるといえよう。特異な文化を有することがよく知られている沖縄より鹿児島の方が無常観と無縁である点が注目に値する。なお、無常観の薄さだけでな

く、上で見たようにムラ意識の希薄さでも鹿児島と沖縄が全国の中でも共通した特徴をもっている点が興味深い。

鹿児島は、現在では、北陸と同様に浄土真宗の信徒が多いが、戦国時代からの300年もの間、真宗は禁教とされており、明治維新以後、国家神道と矛盾しない葬式仏教として急速に普及した。こうした全く異なる経緯を有しているため、北陸とは真逆の無常観が抱かれているのであろう。

「よそ者意識」と「無常観」という2変数から県民意識の分布を見ると、同じ北陸でも、石川、福井、富山は比較的似ているが、新潟はかなりグループから外れることが分かる。

北陸は戦国時代に浄土真宗（一向宗）が広がり、今でも、浄土宗系の信仰が全国の中でも根強いが、新潟はその点の特徴が薄い。また新潟は江戸時代から江戸方面への出稼ぎが多いなど、他地域、特に首都圏との交流性の高さにおいて、北陸の中でも特異である。こうしたことから県民意識の上でも新潟とそれ以外とでは差が生じているのだと考えられる。

また、北陸から四国に目を転じると、徳島と香川が似ており、また、愛媛と高知が似ているが、両者は全く異なった県民性を有していることが分かる。外洋性の高知、愛媛、内湾で関西とつながる香川、徳島という立地の違いがこうした意識の差を生んでいると考えられよう。

なお、同じ設問で調査が行われた1978年調査の結果について、以上と同じ散布図による分析を行ってみると、実は、鹿児島や沖縄、あるいは新潟の特徴は、1996年調査ほど明確ではない。この点に関して、私は、県間移動が激しかった高度成長期に近い時期には明らかでなかったもともとの地域性が、「地方の時代」へ向かうその後の動きの中で1996年には再び輪郭を頭在化させてきたからではないかと見ている。